

自分の人生を決定づけた出会い

中西 光夫*

Nakanishi Mitsuo

誰だって自分の人生を左右するような出会いが何度かあるのだと思うが、私の場合を振り返ってみて、そうした出会いを2つほど紹介したい。

最初はコンピュータとの出会いであり、もう一つはワグナー・オペラとの出会いである。

1. コンピュータとの出会い

話は30年ほど前にさかのぼる。私はまだ30歳前後の若いエンジニアだった。

IHI横浜事業所の、その頃でもすでに傾きかかっていたオンボロの設計事務所の中。誰もいないコンピュータ端末室で、ディスプレイの緑の文字を見ながら、キーボードを叩いていた。

コンピュータはDEC社（米国のメーカーで、現在は存在しない）のVAX11/780という、ミニコンである。ミニコンというのは、今でいうサーバー機の祖先である。もちろん大規模な計算を行うためには、メインフレームと呼ばれる大型計算機を使うのだが、これは使用しただけ金がかかる。当時、原子力事業部では、配管の解析等の用途にはコンピュータ稼働時間で使用料を賦課されたりしない、電気代だけで使えるミニコンを導入していたのである。

VAX11/780は当時かなりのシェアを持つ代表的なミニコンであった。計算機の処理速度を示す単

位にMIPSというのがある。細かい話は抜きにして、VAX11は1MIPS（1秒間に100万回の命令を処理できる）である。つまりこれがすべての計算機の速さの尺度だったわけだ。今では掌にのるiPhone、iPod用のプロセッサが数百MIPSである。とんでもない時代になったものだ。

さて、VAXはVT100ターミナルという専用の端末機を介して使うのである。VT100の大きさは今のデスクトップ・パソコン並みだが、自分で計算する力はなく、ただの入力インターフェースに過ぎない。ただ、そのキーボードはストロークが長く、スムーズでしっかりしていて、このあたりの感触は昨今のパソコン用あたりとは比較にならない。

VAXには、VMSというOS（オペレーティング・システム）が載っていた。パソコンでいうなら、ちょうどMS-DOSのようなものである。グラフィックの表示のできない、文字だけの表示の端末であるから、もちろんマウス等はない。操作はキーボードだけで行う。

そのころのパソコン（まだpersonal computerという名称すらなかった）は、BASICの時代で、まだMS-DOSも普及していなかった。その時代にVMSの機能は際だっており、その何でもできる多機能さ、使い勝手の良さ、充実したヘルプ機能には文字どおり圧倒された。余談だが、VMS

* 取締役 管理室長

の設計者デヴィッド・カトラーは、後年マイクロソフト社に招聘されて、WindowsNT を設計する。WindowsNT は現在の WindowsXP や Vista、7 の心臓部そのものである。WindowsNT (WNT) が VMS のアルファベットを一文字ずらした略号となっているのは有名である。

さて、話は 30 年前の端末室に戻る。そこで暇な時間に、私はゲームをやっていた。

VAX/VMS には標準で何種類かのゲームがインストールされていたのである。

もちろん、当時メーカー製のゲームソフトなぞあろうはずもなく、ユーザー手作りのものばかりである。中でも私の気に入ったのは、アドベンチャー・ゲームだった。題名も ADVENTURE でそのものずばり。「YOU ARE STANDING IN FRONT OF A SMALL BRICK BUILDING...」(あなたは小さな煉瓦造りの建物の前に立っています...) でゲームは始まる。

コンピュータ相手に命令を入力すると、それに応じた反応が返ってくる。命令の与え方次第で、ゲームの展開はいかようにでも変化する。

このゲームは、FORTRAN 言語で書かれていて、ソースコードも付属していた。当時の FORTRAN の言語仕様は原始的で、そもそも文字列型の変数すらない。アドベンチャー・ゲームというのは、

文字列の解析に終始するプログラムであるから、これを使ってこんなプログラムを書くには、裏技的なテクニックが必須である。ソースコードには、作者の名前も書かれていたが、その見ず知らずのアメリカ人(であろう)プログラマーの技には驚嘆した。

プログラムとデータ部分が分離しているのはもちろん、データ部分の構造がよく考えられていて、プログラムを変えることなく簡単に拡張できる仕組みとなっていた。もちろん今なら気の利いた中学生だって、そういう構造のプログラムを書けるだろうが、なにしろ 30 年前の話である。

こうして、コンピュータにインスパイアされた日々が続いた。後年自分の仕事が電算システム開発に変わるとは、夢にも思っていなかった。しばらくの間楽しんでいたのであるが、ある時、どこぞの阿呆が VAX のシステム全体を壊してしまった。もちろんシステム自体はバックアップ・テープで修復されたが、ゲーム・ディレクトリは修復されずに、そのままになってしまった。

2. ワグナーとの出会い

この話も 20 年以上さかのぼる。横浜でワグナーの「ニーベルングの指輪」の公演があると聞いた。西ドイツのベルリン・ドイツ・オペラが来日して



20 年前のワグナーオペラのパンフレット。背景の楽譜はワルキューレ

演奏するのだという。もちろんベルリンの壁が崩壊する前の話である。

そのころ、クラシック音楽は一応聴いていたが、コンサート通いはそれほど熱心というわけではなかった。

これは、未だにそうである。それがどういう訳か、チケットを手に入れようという気になった。会場は横浜・山下公園の県民ホールなのだが、予約販売はとうに終了しており、売り出し日に会場で行列しないと到底手に入らないだろうと言われた。

売り出しの日、朝一番のバスに乗って県民ホールに向かった。なんと休日の朝早くというのに、県民ホールを取り巻いて行列ができています。慌てて並んで、どうにか「神々の黄昏」のチケットを手に入れることができました。

「ニーベルングの指輪」は「ラインの黄金」「ワルキューレ」「ジークフリート」「神々の黄昏」の4部作であり、これらが4日間にわたって演奏される。「ラインの黄金」は少し短い、あとは演奏時間が4時間半以上に及ぶ大作ぞろいである。

良い演奏を聴いたときには鳥肌が立つ。本当に鳥肌が立つのである。このときの神々の黄昏の演奏で、主役の二人ルネ・コロとカトリーヌ・リゲンツァの二重唱を聴いたときには、本当に総毛立った。後で知ったのだが、この県民ホールでの神々の黄昏公演は、まさに日本初演であった。

演奏以外にも、ゲッツ・フリードリッヒの演出に度肝を抜かれた。ゲルマンの英雄ジークフリートがタキシードを着て、お白粉を塗って、ほお紅をさして登場するのである。当時はパトリス・シェローのことも、2人のフランス人がバイロイトに旋風をまき散らした、大胆な改革のこともつゆ知らなかった。こんな演出がヨーロッパで渦を巻いていたことなど知るよしもない。

自分はこの日からワグネリアンになった。ワグナー・オペラの魅力の一つは、その時代の世相を

敏感に反映した演出である。例えば、チェルノブイリの後のハリー・クプファー演出のバイロイトでは、ジークフリートが無敵の剣ノートゥングを鍛える鍛冶場が、壊れた原子炉容器を思わせるものになっていた。2002年になってから、この演出の日本公演が行われた。何を置いても見に行ったのは当然のこと。

きっと自分はこの先死ぬまで、指輪の公演記録を買い求めると思う。映像の記録は、映画からVHSテープ、レーザーディスク、DVDと変わってきたが、いずれすべてBlue-Rayということになるであろう。

今ここに、60年近く前の指輪公演のCDがある。フルトヴェングラーが戦後イタリアのスカラ座を振った記録だ。ワグナーはイタリア人には歌えないからと、フルトヴェングラーはドイツからソリストを連れて行った。古い録音なので、モノラル録音だし、音は非常に悪い。ライブ録音なので観客のノイズも結構拾っている。

今日改めてこのスカラ座公演を聞き直してみた。私はかつてオーディオマニアだったが、今はお手軽なパソコンのUSBオーディオで済ませている。昔使っていたオーディオ・システムから見れば、比較にならぬ貧弱な音だ。しかしそんな貧弱な音の中からでも、素晴らしい音楽を確かに聴き取ることができる。このスカラ座公演記録の「神々の黄昏」はもちろん素敵だが、個人的な理由から私はあえて「ワルキューレ」を採る。まったく偶然なのだが、このスカラ座公演「ワルキューレ」の録音された日は、私の誕生日なのである。



取締役 管理室長

中西 光夫

TEL. 03-3778-7908

FAX. 03-3778-7950